

# 原子炉実験所だより

## 目次

1.京都大学原子炉実験所一般公開について	1
2.管理区域入退出の新システムについて	2
3.原子炉実験所の平成13年度出版物について	4
4.外国人研究者講演会報告	6
5.招へい外国人学者の受入れについて	8
6.外国人共同研究者の受入れについて	8
7.原子炉実験所運営委員会委員名簿	9
8.原子炉実験所各種委員会委員名簿	10
9.職員の異動	15
10.委員会メモ(平成14年2月～14年4月)	19
編集後記	20

## 1. 京都大学原子炉実験所一般公開について

京都大学原子炉実験所では、恒例の一般公開を4月6日（土）午前10時から午後4時まで開催した。参加者は、地元住民を中心に約170名であった。

施設見学は、7～8名の参加者に案内者として所員が付き添う「見学ツアー」として行い、KUR（京都大学研究用原子炉）、KUCA（臨界集合体実験装置）、放射性廃棄物処理棟各施設の見学を行なった。また、所内には原子力を中心とした科学一般に関するビデオの上映コーナーを設け、日本原子力学会関西支部・原子力オープンスクールワーキンググループが中心となって「科学実験体験コーナー」も開設した。

このうち「科学実験体験コーナー」では、「放射線の足跡をみる」というテーマで行なった霧箱実験が特に好評を得た。この実験は、参加者は霧箱の作製から始め、自らが作製した霧箱で放射線の軌跡を見るという実体験を得ることができた。

原子炉実験所では、今後ともこのような地元住民を中心としたイベントを充実させ、原子力と科学の世界に触れる場を設ける方針である。



## 2. 管理区域入退出の新システムについて

放射線管理部では、これまで原子炉棟入口で行っていた入退管理の自動システムを7ヶ所（原子炉棟、CA棟、TL棟、ライナック棟、ガンマ棟、処理棟、使用済燃料室）に増設するとともにガラスバッジ（GB）またはポケット線量計（PD）に添付されている2次元バーコードにより入退出の許可を判定する新システムに変更しました。

平成14年5月1日以降はGBまたは2次元バーコードのついたPDを携行しないと入退出が出来なくなりました

### 《入室方法》

1. 2次元バーコードをバーコードリーダーの読取面に近づけてください（図1、2）。



図1 2次元バーコード付ガラスバッジ用

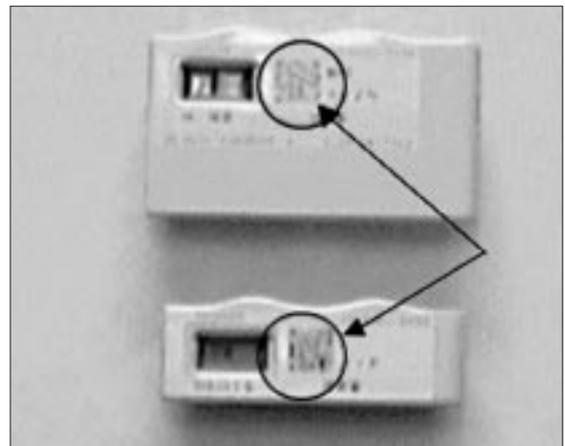


図2 2次元バーコードリーダー（入口）

2. 読取距離は、約7 cmです。入室が許可されると「ビッ」という短いブザー音がして、入室できます。読取ミスか入室不可の場合は「ビー」と長いブザー音になります。
3. 入退出記録簿への記帳は必要ありません。

### 《退室方法》

1. バーコードをハンドフットクロスモニタ（HF C M）横に設置されているバーコードリーダー（B C R、図3）に近づけ読みとらせてください。これでHF C Mが使用可能になります。
2. 通常どおりの手順で汚染検査を実施してください。
3. 「正常」であれば出口のB C Rにバーコードを近づければ、ゲートまたはドアが解錠され退出できます。
4. 汚染があれば退出不可となるので、各自除染を行ってください。除染後、再度HF C Mにかかり「正常」になれば退出できます。除染が難しい場合または汚染の拡大の可能性がある場合には、次の機器異常等でロックされた時と同じ処置をとって下さい。



図3 H F C M横のB C R

《機器異常等でロックされた時の処置》

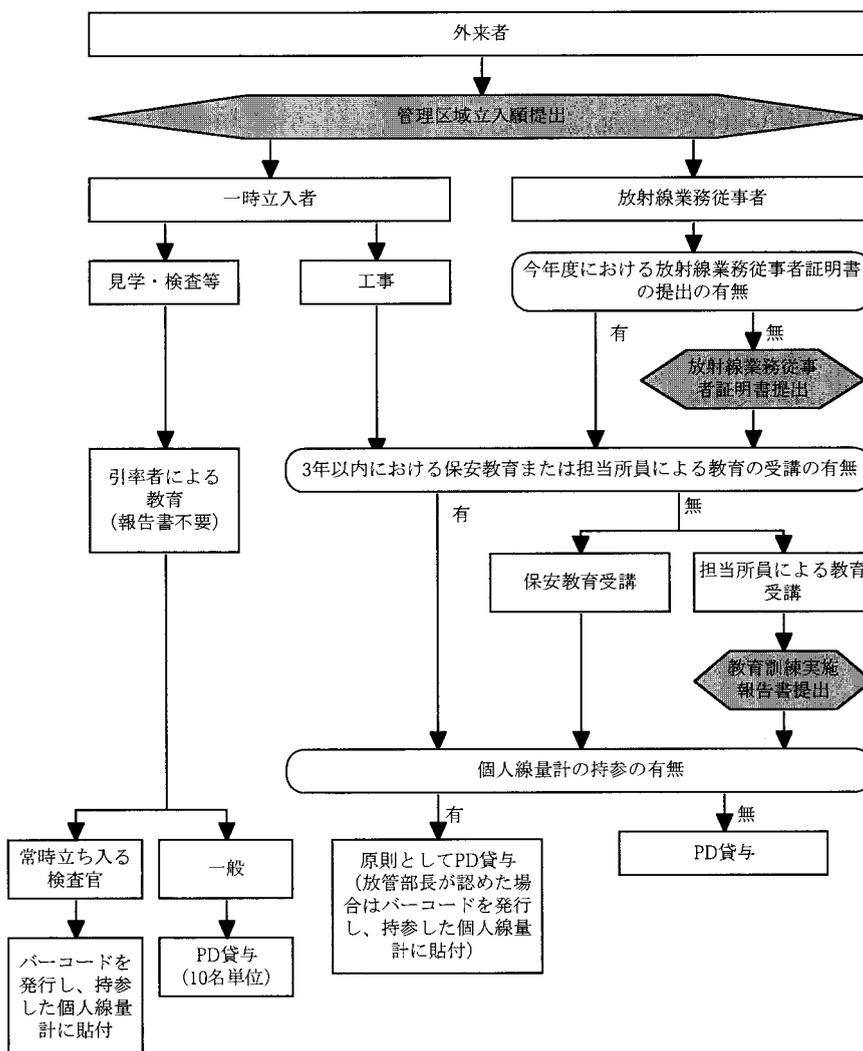
1. 各施設の担当者（各棟のHF CM付近に提示されている者）又は保健物理室（内線2333）当番者に連絡して下さい。
2. 保健物理室閉室時には、中央管理室(内線2400)に連絡し、放射線管理部員を呼び出して下さい。

《立入者（放射線業務従事者の所員を除く）》

1. 管理区域（上記7箇所）への立入りには、「管理区域立入願」を原則として1週間前までに共同利用掛または保健物理室に提出する必要があります。
2. 立入者は、来所時に保健物理室の窓口で「管理区域立入願」とバーコードが張られたPD（1施設のみ立入者は、その施設に備え付けられているPDを施設担当者から受け取る）を受け取り、管理区域の入退を行います。
3. 用務終了後は、「管理区域立入願」にPDの線量指示値等を書きこみ、PDを借り出したところに返却した後、「管理区域立入願」を保健物理室に返却して下さい。

参考に、外来者の管理区域立入り手続きに関するフローチャートを掲載します。(フローチャート)

外来者の管理区域立入手続きに関するフローチャート



### 3. 原子炉実験所の平成13年度出版物について

○ 原子炉実験所の研究活動及び共同利用研究報告、研究会報告等の出版物

#### 1. 『KURRI Progress Report 2000』(目次)

##### I. RESEARCH ACTIVITY

1. Slow Neutron Physics and Neutron Scattering
2. Nuclear Physics and Nuclear Data
3. Reactor Physics and Reactor Engineering
4. Material Science and Radiation Effects
5. Geochemistry and Environmental Science
6. Life Science and Medical Science
7. Neutron Capture Therapy
8. Neutron Radiography and Radiation Application
9. TRU and Nuclear Chemistry
10. Health Physics and Waste Management

##### II. ORGANIZATION

##### III. RESEARCH DIVISIONS AND LABORATORIES

##### IV. OPERATION AND DEVELOPMENT OF FACILITIES

##### V. RADIATION PROTECTION AND MONITORING

##### VI. PUBLICATIONS (APRIL 2000 – MARCH 2001)

##### VII. MEETINGS, SEMINARS AND VISITING SCIENTISTS

##### VIII. COMMITTEE MEMBERS

#### 2. KURレポート (KURRI-KR)

「陽電子ビームの形成と理工学への応用」

- |  |      |                 |
|--|------|-----------------|
| 専門研究会報告書 (平成12年度) .....                                  | 2001 | ・KURRI - KR -63 |
| スピネコー分光法の開発と応用 ワークショップ報告書 .....                          | 2001 | ・KURRI - KR -64 |
| 「極端条件下における中性子回折・散乱」第3回ワークショップ報告書<br>.....                | 2001 | ・KURRI - KR -65 |
| 「KUR極冷中性子研究会」 .....                                      | 2001 | ・KURRI - KR -66 |
| 中性子基礎物理研究会 .....   | 2001 | ・KURRI - KR -67 |
| 原子力分野における加速器の研究開発ワークショップ<br>-21世紀における加速器・ビーム科学の研究開発の在り方- | 2001 | ・KURRI - KR -68 |
| 平成13年度「放射性廃棄物管理専門研究会」報告書 .....                           | 2002 | ・KURRI - KR -69 |

「中性子ラジオグラフィ高度技術の開発と応用」	
専門研究会（平成13年度）	2002・KURRI - KR - 70
「トリチウム安全理工学」専門研究会報告書	2002・KURRI - KR - 71
「中性子散乱による物質構造解析の展望」	
－低分子から巨大分子まで－専門研究会報告	2002・KURRI - KR - 72
平成13年度「アクチノイド元素の化学と工学」専門研究会報告書	
.....	2002・KURRI - KR - 73
「放射線と原子核をプローブとした物性研究の新展開」	
専門研究会報告（Ⅲ）（平成13年度）	2002・KURRI - KR - 74
京都大学原子炉実験所「将来計画」短期研究会報告書 平成13年度会合	
.....	2002・KURRI - KR - 75
「陽電子ビームの形成と理工学への応用」	
専門研究会報告書（平成13年度）	2002・KURRI - KR - 76

### 3. テクニカルレポート（KURRI-TR）

KURの水压輸送管（Hyd）および圧気輸送管（Pn）照射カプセル内の中性子束分布、 Epithermal Index、Westcott 流熱中性子束の測定.....	2001・KURRI - TR -432
---	----------------------

上記出版物をご希望の方は、下記宛にご請求下さい。

[請求先] 〒590-0494

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

出版委員会

## 4. 外国人研究者講演会報告

原子炉実験所利用研究者グループの後援により下記のとおり講演会が行われました。

○日 時： 平成14年2月4日（月） 15：00～17：00

場 所：図書棟会議室

出席者：17名

講 師：ウクライナ科学アカデミー・サイバネティックス研究所、Volodymyr Tykhyy

演題及び講演概要：Current Situation of Industrial Activities and Related Environmental Problems in Ukraine

Tykhyy 氏はもともとキエフ核研究所の核物理研究者であったが、ウクライナ “Green World” の創設に関わるなど、旧ソ連末期の民主化運動に積極的に参加した。ソ連崩壊後は、NGO “Environment Education and Information Center” を主宰したり、UNDP のコンサルタントを勤めたりしながら、現在はサイバネティックス研究所の上級研究員を兼任しているという多彩な経歴の持ち主である。本講演は、ウクライナの歴史・文化の紹介からはじまり、ソ連時代にウクライナが置かれていた立場、チェルノブイリ事故の放射能汚染測定に携わった自らの体験、さらには現在のウクライナの政治・経済問題、環境問題に至るまで広汎な話題が紹介された。

チェルノブイリ原発は一昨年12月に閉鎖されたが、これはウクライナ政府と G 7 諸国との間で、原発閉鎖と経済援助をめぐる政治的取引の結果とのことであった。チェルノブイリ原発は危険だとして閉鎖を要求しながら、ロシアの同じ RBMK 型原発について黙っている G 7 の態度はおかしいという Tykhyy 氏の指摘はもっともであった。ウクライナでは現在、13基の VVER 型原発が運転されており、電力の43%を供給している。ウクライナの原発開発の今後の動向は、他のエネルギー源と経済性の比較、また原発建設に反対する市民運動との関係によって決まるであろうというのが Tykhyy 氏の見解であった。

○日 時：平成14年2月13日（水） 15：20～16：00

場 所：事務棟会議室

出席者：25名

講 師：イギリス、ラザフォード・アップルトン研究所

Dr. Alex Hannon

演題および講演概要：Diffraction Studies of Disordered Materials at ISIS

Pulsed neutron diffraction is a very powerful technique for studying the structure of disordered materials, by virtue of its high real – space resolution.

Recent data on calcium aluminates and other glasses are used to demonstrate the power of pulsed neutrons to probe glass structure, and it is shown that the methods of chemical crystallography may be applied to a consideration of glass structure.

Recent data on crystalline silver cyanide and copper cyanide are used to show how methods developed for the study of non – crystalline materials may also be used to investigate the structure of disordered crystalline compounds.

○開催日時：平成14年3月19日（火）午後2時－5時

場 所：事務棟会議室

出席者：約30名

講 師：米国 Lawrence Livermore 国立研究所 客員研究員 C. T. Alonso 博士

演題及び講演概要：Discovery and naming of Element 106 (Seaborgium)

C. T. Alonso 博士は106番目の元素である「Seaborgium」の探索グループの一員として活躍された経歴をお持ちである。今回初めて来日された機会に、その「Seaborgium」の探索実験の紹介と発見事実の公表や命名に関する歴史的なエピソードなど貴重な体験を伺うことができた。探索実験でのターゲット開発など実験手法の紹介もさる事ながら、東西冷戦のさなか誰が新元素発見者になるかを巡ってのアメリカとロシアの研究者の間の駆け引き、探索グループのリーダーでノーベル賞受賞者の Seaborg がノーベル賞よりも自分の名前が元素の名前になった事が嬉しいと言っていた事など、論文だけでは判らない裏話が大変興味深かった。

また、この講演会では米国 Lawrence Berkeley 国立研究所上級研究員の J. R. Alonso 博士にも講演して頂き、アメリカで進行中の加速器による大強度中性子源 SNS プロジェクトの現状報告及び研究計画など興味深い話題を提供していただいた。次期計画として加速器中性子源の開発を検討している我々にとっても大いに参考になるものであった事を付記しておく。

## 5. 招へい外国人学者の受入について

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
Volodymyr Tykhyy (ウクライナ科学アカデミー・サイバネティックス研究所 上級研究員)	放射能汚染測定法に関する相互比較の検討	平成14年2月1日～ 平成14年2月6日	原子炉安全管理研究部門 助手 今中 哲二
Min Young-Gi (韓国 東亜大学校 自然科学部 新素材物理学科 講師)	加速器を用いた実験データの解析及び研究討論	平成14年2月6日～ 平成14年2月15日	原子炉安全管理研究部門 教授 小林 捷平
Jose R. Alonso (米国 ローレンス・バークレイ国立研究所 上級研究員)	米国で進行中の大強度中性子源プロジェクト(SNS)の紹介及び実験所での中性子源としての加速器建設の技術的検討	平成14年3月17日～ 平成14年3月31日	応用原子核科学研究部門 教授 川瀬 洋一
Carol Travis Alonso (米国 ローレンス・リヴァモア国立研究所 Participating Guest Scientist)	新しい超ウラン元素合成に関する講演と議論	平成14年3月17日～ 平成14年3月31日	応用原子核科学研究部門 教授 川瀬 洋一
金 貴 年 (韓国 慶北大学校 招へい教授)	中性子捕獲断面積に関する研究打合せ及び討論	平成14年4月14日～ 平成14年4月24日	原子炉安全管理研究部門 教授 小林 捷平
Uma Devi Pathirissery (インド ジャハハラダールネハル がん病院研究所 研究部長)	放射線障害に関する共同研究	平成14年4月15日～ 平成14年5月1日	放射線生命科学研究部門 教授 内海 博司

## 6. 外国人共同研究者の受入について

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
李 三 烈 (日本学術振興会 外国人特別研究員)	アクチニド及び長寿命核分裂生成物の中性子捕獲断面積に関する実験的研究	平成14年4月1日～ 平成15年3月31日	原子炉安全管理研究部門教授 小林 捷平

## 7. 原子炉実験所運営委員会委員名簿

平成14年4月1日現在  
(順序不同)

東 京 大 学	大学院工学系研究科	教 授	中 澤 正 治
東 京 工 業 大 学	原子炉工学研究所	同	二ノ方 壽
金 沢 大 学	理 学 部	同	中 西 孝
名 古 屋 大 学	大学院工学研究科	同	山 根 義 宏
大 阪 大 学	産 業 科 学 研 究 所	同	田 川 精 一
同	大学院工学研究科	同	竹 田 敏 一
同	大学院医学系研究科	同	井 上 俊 彦
同	大学院基礎工学研究科	同	若 林 克 三
神 戸 大 学	大学院医学系研究科	同	市 橋 正 光
京 都 大 学	大学院理学研究科	同	今 井 憲 一
同	大学院医学研究科	同	平 岡 眞 寛
同	大学院工学研究科	同	森 澤 眞 輔
同	原 子 炉 実 験 所	同	小 野 公 二
同	同	同	内 海 博 司
同	同	同	川 瀬 洋 一
同	同	同	松 山 奉 史
同	同	同	齊 藤 眞 弘
同	同	同	工 藤 章
同	同	同	三 島 嘉 一 郎
同	同	同	代 谷 誠 治
同	同	同	西 牧 研 壯
同	同	同	小 林 捷 平
同	同	同	中 込 良 廣
同	同	同	河 合 武
同		事 務 局 長	本 間 政 雄

## 8. 原子炉実験所各種委員会委員名簿

### 研究計画委員会

平成14年5月17日現在  
(順序不同)

大阪大学	産業科学研究所	教授	田川精一
大阪大学	大学院工学研究科	同	竹田敏一
名古屋大学	大学院工学研究科	同	山根義宏
京都大学	大学院理学研究科	同	今井憲一
○ 同	原子炉実験所	同	代谷誠治
同	同	同	内海博司
同	同	同	福永俊晴
同	同	同	山名元
同	同	助教授	瀬戸誠
同	同	同	沖雄一
○ 委員長			

共同利用研究委員会

平成14年5月16日現在  
(順序不同)

東京大学	大学院工学系研究科	教授	中澤正治
愛知学泉大学	家政学部	"	井関道夫
大阪大学	大学院理学研究科	"	篠原厚
京都府立医科大学	医学部	助教授	今堀良夫
九州大学	医療技術短期大学部	"	鬼塚昌彦
大阪大学	大学院工学研究科	"	山本敏久
武蔵工業大学	工学部	教授	吉田正
金沢大学	理学部	"	中西孝
理化学研究所	情報基盤研究部	副主任研究員	清水裕彦
日本原子力研究所	先端基礎研究センター	主任研究員	加倉井和久
同	同	副主任研究員	市川進一
人間環境大学	人間環境学部	教授	片山幸士
京都大学	原子炉実験所	教授	義家敏正
○ 同	同	同	川瀬洋一
同	同	同	齊藤真弘
同	同	同	西牧研壯
同	同	同	山名元
同	同	助教授	川端祐司
同	同	同	増永慎一郎
同	同	同	藤井紀子
○ 委員長			

臨界集合体実験装置共同利用研究委員会

平成14年4月1日現在  
(順序不同)

北海道大学	大学院工学研究科	教授	島津洋一郎
東京工業大学	原子炉工学研究所	助教授	赤塚洋
大阪大学	大学院工学研究科	教授	竹田敏一
日本原子力研究所	東海研究所	主任研究員	岡嶋成晃
近畿大学	原子力研究所	助教授	橋本憲吾
京都大学	原子炉実験所	教授	三島嘉一郎
○ ”	”	”	代谷誠治
”	”	”	小林捷平
”	”	助教授	三澤毅
○ 委員長			

原子炉医療委員会

平成14年4月1日現在

○ 京都大学原子炉実験所	教授	
附属原子炉医療基礎研究施設	施設長	小野公二(1号委員)
大阪大学大学院医学系研究科	教授	井上俊彦(2号委員)
京都大学原子炉実験所	”	内海博司( ” )
茨城県立医療大学	副学長	稲田哲雄(3号委員)
京都府立医科大学	名誉教授	上田聖( ” )
京都大学大学院医学研究科	教授	平岡真寛( ” )
”	”	宮地良樹( ” )
”	”	小西淳二( ” )
大阪大学大学院医学系研究科	”	中村仁信( ” )
京都大学原子炉実験所	”	小林捷平(4号委員)
”	助教授	福井正美( ” )
○ 委員長		

## 原子炉安全委員会

平成14年5月16日現在

- |              |     |    |                 |
|--------------|-----|----|-----------------|
| ○ 京都大学原子炉実験所 | 所長  | 井上 | 信               |
| 大阪大学大学院工学研究科 | 教授  | 竹田 | 敏一（規程第4条第2項第1号） |
| 京都大学大学院工学研究科 | ”   | 芹澤 | 昭示（”）           |
| 近畿大学原子力研究所   | 助教授 | 橋本 | 憲吾（”）           |
| 京都大学原子炉実験所   | 教授  | 川瀬 | 洋一（”）           |
| ”            | ”   | 齊藤 | 眞弘（”）           |
| ”            | ”   | 代谷 | 誠治（”）           |
| ”            | ”   | 西牧 | 研壯（”）           |
| ”            | ”   | 小林 | 捷平（”）           |
| ”            | ”   | 中込 | 良廣（”）           |
| ”            | ”   | 福永 | 俊晴（”）           |
| ”            | ”   | 三島 | 嘉一郎（”）          |
| ”            | ”   | 山名 | 元（”）            |
| ”            | 助教授 | 福井 | 正美（”）           |
| ”            | ”   | 小山 | 昭夫（”）           |
| ”            | ”   | 古林 | 徹（規程第4条第2項第2号）  |
| ”            | ”   | 三澤 | 毅（”）            |
| ”            | 教授  | 柴田 | 誠一（規程第4条第2項第3号） |
| □ ”          | 助手  | 中村 | 博、山本修二          |

○ 議長

□ 書記

## 保 健 物 理 委 員 会

平成14年 5 月16日現在

○ 京都大学原子炉実験所	所 長	井 上 信
大阪府立大学先端科学研究所	教 授	大 嶋 隆一郎 (規程第 5 条第 2 項第 1 号)
京都大学大学院薬学研究科	"	佐 治 英 郎 (" )
京都大学原子炉実験所	"	川 瀬 洋 一 (" )
"	"	齊 藤 眞 弘 (" )
"	"	西 牧 研 壯 (" )
"	"	河 合 武 (" )
"	"	山 名 元 (" )
"	助教授	福 井 正 美 (" )
"	"	小 山 昭 夫 (" )
"	教 授	柴 田 誠 一 (規程第 4 条第 2 項第 2 号)
"	"	中 込 良 廣 (規程第 4 条第 2 項第 3 号)
"	助教授	古 林 徹 (" )
"	"	三 澤 毅 (" )
京都大学保健管理センター	所 長	川 村 孝 (規程第 4 条第 2 項第 4 号)

○ 議 長

## 9. 職 員 の 異 動

### 1. 退職等

◎平成14年 2月28日付け

附属原子炉医療基礎研究施設 (任期满了)	外国人研究員	レ マ ニ ラナプラスバン Remani Ranaprathapan
核エネルギー基礎研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	た なか ふとし 田 中 太
核エネルギー基礎研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	いし ざき とし たか 石 崎 敏 孝
バックエンド工学研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	ふじ わら けん そう 藤 原 健 壮
応用原子核科学研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	ご とう じゅん 後 藤 淳
応用原子核科学研究部門 (任期满了)	リサーチ・アシスタント	こ ばやし ひろ のり 小 林 弘 典
放射線生命科学研究部門	リサーチ・アシスタント	た なか けん いち 田 中 憲 一

◎平成14年 3月31日付け

中性子科学研究部門 (定年退職)	教 授	ふじ た よし あき 藤 田 薫 顕
放射線生命科学研究部門 (定年退職)	教 授	は せ ひろ とも 長 谷 博 友
附属原子炉応用センター (定年退職)	教 授	かん だ けい じ 神 田 啓 治
中性子科学研究部門 (定年退職)	助 教 授	え び さわ とおる 海老澤 徹
原子炉安全管理研究部門 (定年退職)	助 手	すみ の てる いえ 隅 野 照 家
事務部総務課専門職員 (定年退職)	事 務 官	たま の てつ お 玉 野 哲 雄
核エネルギー基礎研究部門 (理化学研究所情報基盤研究部イメージ情報技術開発室室長) (任期满了)	客 員 助 教 授	し みず ひろ ひこ 清 水 裕 彦

核エネルギー基礎研究部門 (近畿大学原子力研究所助教授) (任期満了)	客員助教授	ふじ かわ かず お 藤 川 和 男
原子炉安全管理研究部門 (任期満了)	非常勤研究員	り さん よる 李 三 烈
核エネルギー基礎研究部門 (任期満了)	非常勤研究員	やなぎ だ せい や 柳 田 誠 也
原子炉安全管理研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	いけ だ え み 池 田 恵 美
附属原子炉応用センター (任期満了)	事務補佐員	す とう く み 周 藤 究 美

2. 併任期間満了

◎平成14年 3月31日付け

バックエンド工学研究部門 (大学院工学研究科教授)	教 授	もり やま ひろ たけ 森 山 裕 丈
附属原子炉応用センター長 (放射線生命科学研究部門教授)	教 授	うつ み ひろ し 内 海 博 司

3. 採 用

◎平成14年 4月 1日付け

原子炉安全管理研究部門	助 手	かわ べ ひで のり 川 辺 秀 憲
附属原子炉医療基礎研究施設	助 手	なが た けん じ 永 田 憲 司
附属原子炉医療基礎研究施設	助 手	すず き みのる 鈴 木 実
附属原子炉医療基礎研究施設	非常勤研究員	アティア アクター ハミッド Atia Akhtar Hamid
核エネルギー基礎研究部門	研究支援推進員	たき まさ こ 瀧 雅 子
放射線生命科学研究部門	事務補佐員	たか だ き み こ 高 田 貴美子

◎平成14年 5月 7日付け

中性子科学研究部門	リサーチ・アシスタント	まる やま りゅう じ 丸 山 龍 治
核エネルギー基礎研究部門	リサーチ・アシスタント	さ とう こう いち 佐 藤 紘 一
核エネルギー基礎研究部門	リサーチ・アシスタント	いし さき とし たか 石 崎 敏 孝
応用原子核科学研究部門	リサーチ・アシスタント	ささ ぬま たかし 笹 沼 崇
応用原子核科学研究部門	リサーチ・アシスタント	こ ばやし ひろ のり 小 林 弘 典

#### 4. 昇 任

◎平成14年 3 月 1 日付け

核エネルギー基礎研究部門  
(同研究部門助手より)

助 教 授

おか だ もり たみ  
岡 田 守 民

◎平成14年 4 月 1 日付け

中性子科学研究部門  
(同研究部門助手より)

助 教 授

た さき せい じ  
田 崎 誠 司

事務部総務課共同利用掛長  
(基礎物理学研究所庶務掛主任より)

事 務 官

は せ がわ  
長谷川 やよい

事務部経理課用度掛長  
(経理部経理課共済組合掛主任より)

事 務 官

いな だ かず み  
稲 田 一 美

◎平成14年 5 月16日付け

バックエンド工学研究部門  
(同研究部門助教授より)

教 授

やま な はじむ  
山 名 元

#### 5. 配置換

◎平成14年 4 月 1 日付け

原子炉安全管理研究部門  
(附属原子炉医療基礎研究施設助手より)

助 手

き なし ゆう こ  
木 梨 友 子

原子炉安全管理研究部門  
(技術室原子炉機械系管理掛長より)

助 手

やま もと しゅう じ  
山 本 修 二

事務部総務課専門職員  
(研究協力部研究協力課専門職員より)

事 務 官

なが た とし ゆき  
長 田 敏 之

事務部総務課共同利用掛長  
(再生医科学研究所庶務掛長へ)

事 務 官

よし むら あつ お  
吉 村 淳 郎

事務部経理課電気掛  
(施設部電機気情報設備課第四電気掛へ)

技 官

の ぐち まさ のぶ  
野 口 公 伸

#### 6. 転 出

◎平成14年 4 月 1 日付け

事務部経理課用度掛長  
(京都工芸繊維大学教務課教務企画係長へ)

事 務 官

かつ べ つとむ  
勝 部 力

事務部経理課用度掛	事務官	まつ 松	した 下	さとし 聡
(独立行政法人京都国立博物館総務課会計係へ)				

7. 転入

◎平成14年4月1日付け

事務部経理課電気掛長	技官	き 木	むら 村	とし 俊	お 雄
(和歌山大学施設課電気係長)					

8. 併任

◎平成14年4月1日付け

附属原子炉応用センター長	教授	さい 齊	とう 藤	まさ 眞	ひろ 弘
(原子炉安全管理研究部門教授)					

附属原子炉医療基礎研究施設長	教授	お 小	の 野	こう 公	じ 二
(再任)					

(同研究施設教授)

核エネルギー基礎研究部門	客員助教授	おに 鬼	づか 塚	よし 昌	ひこ 彦
(九州大学医療技術短期大学部助教授)					

9. 名称付与

◎平成14年4月1日付け

核エネルギー基礎研究部門	客員教授	まる 丸	やま 山	かず 一	お 雄
(帝京大学薬学部教授)					

## 10. 委員会メモ

(平成14年2月～14年4月)

2月 1日 研究計画委員会

2月13日 臨界集合体実験装置共同利用研究委員会

2月18日 協議員会

2月25日 原子炉安全委員会

3月18日 協議員会

3月22日 研究計画委員会

3月25日 原子炉安全委員会・保健物理委員会合同委員会

4月22日 研究計画委員会・運営委員会・協議員会

4月30日 原子炉安全委員会

## 編集後記

ふとしたことから久しぶりに片づけをする気になった。きっかけはいつも使用しているところにある、以前から少しだけだが邪魔に感じていたものを整理したいと思ったことであった。整理整頓は多くの職場で古くから「スローガン」の一つに入っているものである。せっかくその気になったということも手伝って、見えているものだけで済むだろうと、思いきって片づけてしまった後、以前より収まりの悪いことに気付くことになった。そのままにする訳にもいかないのに、芋ずる式に更なる片づけをするハメになった。そのうち片づけに対する気力がしぼんできて「こんなことをしている時期でも状況でもまた時間もない」などと自分勝手な言い訳をして、中途半端な状態で片づけを終わらせた。

国立大学の行政法人への移行の予定が2年後の平成16年4月からと伝えられ、それに向けての動きが、より身近なものにもものになってきている。法人化はいわゆる「上意下達」方式で行われていることに異論はないであろう。数年前から行われている「下達」の浸透が進み、今年に入るところから構成員一人一人にもかなり身近に感じる段階に入ってきている。国立大学の法人化問題は、国家の研究教育の根幹に関わる大きなシステムの改革であることから、下達の段階が進めば進むほど多くの事項にきめ細やかな対応が必要なことは自明である。研究教育の中期計画、中期目標の策定が平成16年度の概算要求の関係から当面の大きな課題になっているが、法人化の課題の最後の部分に入るのは、誰もやりたがらない、しかし避けて通れない、人的なリストラを含む対応になることは予想に難くない。研究教育の決め手は最後は人の問題となることから、中期計画、中期目標の策定と同様に、関係者の先見の明で進められることを期待したい。

大所高所から見て決められたはずの「上意」も下達の段階で変質する可能性があることは容易に予想できる。変質することの原因の大部分はそれに気付かないことと思うが、例え気付いたとしても、十分に確認や修正する時間もマンパワーもないことに加わえて、最近よく言われる「自己責任」の名の下にそのまま進められそうな予感がしてしまうのは悲観的過ぎるだろうか。大学の新学期が始まってまず問題になることの一つは「5月病」と言われて久しい。環境の変化に加えて、目標の喪失、現実と夢や希望や期待とのギャップ等への精神的な不適合が大きな原因と言われている。今という時期的なことと心配性も手伝って、法人化後の大学自身の5月病など、あるはずのない、また、あってはならないことをつい想像してしまった。

たまにする整理整頓には思わぬ発見の効果もあるが、やはり日常的に行う習慣こそ、常に大切なものとそうでないものを区別しておける大きな効用が期待できるものと認識を新たにしたい。その途端、そういえば大分前になる前回の整理整頓でも今回と同じような状況になったことを思いだし、その「スロー感」も再認識した。

(TK)

原子炉実験所だより No5 6

発行：京都大学原子炉実験所

〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町野田

TEL 0724-51-2312 (直)

FAX 0724-51-2620

メールアドレス kyodo@rrikyoto-u.ac.jp

ホームページ <http://www-j.rrikyoto-u.ac.jp/>

編集：「原子炉実験所だより」委員会

発行日：平成14年6月1日

印刷所：株式会社 泉文社

〒590-0821 岸和田市小松里町2557番地

TEL 0724-44-9761

FAX 0724-45-8900

メールアドレス senbun@sensyu.ne.jp